



表紙の説明

昭和3年10月3日、留萌尋常高等小学校付属港北分校として開校。2学級で発足その後昭和7年4月1日に6学級となり、昭和9年3月31日より港北尋常小学校として独立。昭和16年学校令改正により留萌郡港北国民学校。昭和22年新学制により留萌町立港北小学校、同年市制施行により留



萌市立港北小学校。昭和33年元町大火。昭和34年校歌制定。現在、新校舎建設中です。



留萌 第五十九回  
いまむかし

ホウソウのこと

今も昔も伝染病ほど恐ろしいものはない。江戸時代医学の知識に乏しかった人々も伝染病には苦しめられ、一つの民族の衰亡の一端をになったのである。

留萌にも伝染病に対する逸話が残っている。

―今（寛政四年一七九二）より十四年程前、蝦夷地でホウソウが流行した。その流行はマシケまで広がり、多くのアイヌの人たちが死亡した。

隣村、ルルモツペの村おさだったコタンピルは、とても心配して支配人の村山長三郎に次のように相談した。

「いづれこの村でもホウソウが流行するにちがいない。その時我々アイヌは男女残らず山奥に逃げるべきだろうか。」長三郎は

「山奥にひきこもると食糧を差し入れるのも面倒なので、逃げるのはよした方がいい。」と答えた。さらに長三郎は何か良い策はないかと考えたあげく、

「世間の諺に『網の目にも風防ぐ』云々とある。そうだ、マシケとルルモツペの境に網を張ってホウソウを入れないようにしたらどうだろうか。」と、早速コタンピルを呼んでこの話をした。

コタンピルは尤もな言い分だとしてニシン網を残らずだとして、マシケとルルモツペの境にこれを張り、大きな文字で「無用の者入るべからず」という高札を立てた。さらに番人を置き、アイヌの人たちはイナウという神を祭るための削りかけを作って立てた。

そうすると不思議なことにルルモツペではホウソウにかかった者はいなくなつたという。このホウソウはソウヤマで広がり多くのアイヌの人たちが死んだが、ルルモツペだけが助かつたという。

これは串原正峯著「夷諺俗話」という本の中に書かれている話である。

蝦夷地に初めてホウソウが流行したのは寛永元年（一六二四）のことである。蝦夷地への和人の進出が進むにつれ奥地のアイヌの人たちの間に



蝦夷人種疫之図

ちびっこギャラリー

お子さんの絵を募集しています。 ☎2-1801内線293までご連絡ください。



「はなび」 (沖見保育園)

こまかい あさみちゃん (6歳・沖見町)

ことしの、みなとまつりのとき、おかあさんとはなびを、みにいきました。とてもきれいでした。(平成3年度落書きコンクール金賞受賞作品)

